

UWC NEWS

No.49

June 2023

発行：公益社団法人 ユナイテッド・ワールド・カレッジ日本協会



モンテズマ城を校舎に持ち、グランド・キャニオン渓谷でのトレッキングキャンプなど Wilderness program も盛んなアメリカ校

◆ CONTENTS ◆

巻頭言 -----	3	UWC 派遣生の推移、UWC 卒業生の	
2023 年度派遣生名簿 -----	4	進学先 -----	23
2022 年卒業生の声 -----	5	UWC 日本協会会員企業、	
2022 年度 日本協会の活動 -----	20	最近の動向 -----	24
事務局報告 -----	21		
特別寄稿 -----	22		
～UWC 卒業生便り～			
古谷 優子 (アメリカ校 1989 年卒)			
菅沼 珠世 (香港校 2004 年卒)			

UWC/UWC日本協会について

UWC(ユナイテッド・ワールド・カレッジ、本部：ロンドン)は、世界 155 カ国から選抜された高校生を受け入れ、教育を通じて国際感覚豊かな人材を養成することを目的とする国際的な民間教育機関です。現在までに、イギリス、カナダ、イタリア、アメリカ、香港、ノルウェー、オランダ、ドイツ、日本等、18 の国・地域にカレッジ(高校)が開校されています。

わが国でも、UWCプロジェクトの趣旨に賛同して、経団連の協力のもとに、1972 年9月に「UWC国内委員会」が設立され、同委員会は、1975 年2月に社団法人格を取得して「社団法人ユナイテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会」に改組されました。2012 年4月1日には、公益社団法人に移行し、UWCのカレッジに派遣される奨学生の選考、奨学生に対する奨学金の支給、UWC事業の日本への紹介等の事業を行っています。

巻頭言

令和の時代においても「非凡な努力を続けよ」



UWC日本協会会長(アサヒグループホールディングス会長)

小路 明善(こうじ あきよし)

昨年秋に公開された、調べたいことをテキスト入力すると即座に AI が回答を出す ChatGPT サービスが、世間を賑わせています。精度には課題がありますが、分野によっては、人間の能力をしのぐ場面もあります。

皆さんには、AIと競争するのではなく、AIを上手に活用しながら、未来を切り開くことができるような人材になっていただきたいと思います。そして AI を上手に活用していくためにも、自ら考えることのできる人材になっていただきたいと思います。

AIが活躍する時代に「人間はどのような心構えが必要か」と問われたら、私は新入社員時代に営業の先輩から教わった「非凡な努力を続けよ」という教えをお伝えします。自分であれこれ考えながら、1日 20 件の得意先を回るのとは簡単なことではないものの、それを 10 年続ければ何処ででもやっていける営業担当者になれる、と言われました。

人間の成長は、コンピュータのアップデートのように、ある日を境に急に力が得られる類のものではありません。むしろ重要なのは、試行錯誤を繰り返しながら、取り組み続ける意欲を持ち続けられるかどうかでしょう。泥臭いかもしれませんが、私は令和の時代においても、努力の継続こそが成果につながると考え、実際にそういう人を評価しています。

UWCでの日々は、これまでに経験のなかったような貴重な体験の連続かもしれません。しかし同時に、卒業生の先輩からは、語学、予習・復習、ルームメイトとのコミュニケーション等、色々と苦労したとも伺っております。一見するとワクワクするような日々の裏で、地道な努力に挑む覚悟を、UWCを志す皆さんには持っていただければと思います。

卒業生からは、「大変だった」という言葉の後に、「でも成長できた」という言葉が続いて語られます。UWCで学ぶチャンスを得た皆さんも、日々努力を重ねることにより、卒業後に振り返った時に、自らの成長に気付くことでしょう。

また、日本協会では、高校生にUWCでの貴重な学びの経験を積んでいただけるよう、多くの企業からのご支援を得て、奨学金を設けています。企業の皆様には、前途有望な生徒が少しでも多くUWCで学べるチャンスを掴めるよう、ご支援をいただきたく思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

◆ 2023 年度UWC派遣生名簿 ◆

UWC Atlantic College (イギリス校)

キムラ トモカ 大阪府立水都国際高等学校
 木村 智香
 ニシオ チヒロ 福井県立高志高等学校
 西尾 地博
 ヤマノウチコトエ 渋谷教育学園幕張高等学校
 山内 琴絵

UWC Robert Bosch College (ドイツ校)

ヒガシヤマヨシキ 大阪府立北野高等学校
 東山 佳樹

UWC ISAK Japan (日本校)

ヤマモト アヤネ 市川高等学校
 山本 綾音

Pearson College UWC (カナダ校)

コバヤシ ウララ 帝塚山高等学校
 小林 潤良々
 テラダ トモエ 福井県立高志高等学校
 寺田 朋笑

* 個人情報につき、お取扱いには充分ご注意ください。

UWC Adriatic (イタリア校)

イタガキ ジュン 広島県立広島叡智学園高等学校
 板垣 潤
 サナダ カオル 岡山県立岡山操山高等学校
 眞田 薫

UWC-USA (アメリカ校)

ニシムラ サクラ 聖心女子学院高等科
 西村 咲良
 ユアサ ココ 岡山県立岡山操山高等学校
 湯浅 心

一次選考受験人数 (人)

	国立	公立	私立	計
男子	0	8	15	23
女子	5	21	42	68
計	5	29	57	91

Li Po Chun UWC (香港校)

モリヤ ハナ 茨城県立並木中等教育学校
 守屋 花

二次選考受験人数 (人)

	国立	公立	私立	計
男子	0	4	5	9
女子	2	7	16	25
計	2	11	21	34

UWC Red Cross Nordic (ノルウェー校)

トオヤマ ハルカ 雙葉高等学校
 遠山 青伽

最終派遣人数 (人)

男子	3
女子	12
計	15

UWC Maastricht (オランダ校)

サカグチ クリカ ドラムヘラーバレー
 坂口 くり果 セカンダリースクール
 スヤス マナ 愛光高等学校
 須安 真菜

◆ 2022年 卒業生の声 ◆

UWC Atlantic College (イギリス校)

ナショナルリズム

上田 洸太郎



学校よりブリストル海峡を望む

UWCでの2年間を終えて帰国する航空便は、ウクライナ情勢の影響を受けて、中央アジア上空を飛行する南回りのルートをとりました。14時間のフライトの終盤、私は自分の座席の窓の外を流れていく景色を眺めていました。

すると、伊豆半島の北に、雲の間からポツンと顔を出す何かが見えて、まもなく私にはそれが富士山であると分かりました。ただその時、私はある違和感を覚えたのです。上空より見下ろ

した富士山が、全く美しくなかったのです。むしろ、私に言わせれば、まるで地表にポツリとできた巨大な吹き出物。私は富士山に、なんだか幻滅してしまいました。しかし、よく考えてみると、それはUWCでの経験を象徴する出来事であったかもしれません。すなわち、特定の文化や環境の下で生きていくなかで、知らず知らずのうちに(しかも至極当然のこととして)植え付けられていく価値観が崩れ、相対化されていく経験です。

UWCに集まってくる生徒は、自己の価値観を絶対視して、それゆえ内に閉じこもり思考停止に至るような態度を、断じて拒絶します。UWCを魅力的な場所にしているのは、こうした生徒間での、価値観の食い違いになんとか折り合いをつけて共存しようとする営みの迫力ではないでしょうか。そしてそれは現実の世界ではほとんど為されていないのです。ことさら日本においては。

余談ですが、吹き出物の原因は、皮脂を栄養源とする「菌」の増殖だそうです。富士山を、日本列島上の巨大な吹き出物とするならば、富士山を富士山たらしめているのもまた、長年にわたる日本社会での、何らかの「菌」の増殖なのではないでしょうか。

最後に、たくさんの方々の支えなくして、これほどまでに贅沢な学びの機会はありませんでした。そのすべての方々に厚く御礼申し上げます。

* * * * *

無知の知

柴富 日桜里

私にとって2年間のUWC生活での最も大きな収穫は「無知の知」であると思う。渡英前の私は物事の表面を見て、その状況に至った経緯や違った視点をよく吟味せず考えていた。UWCイギリス校の生活はそんな自分の無知さと思考の浅はかさを痛感させられる日々の連続であった。

ある日、冬休みの一時帰国を前に浮かれていた私に、パレスチナ出身の友人が「私は難民キャンプで生まれてパスポートを持っていないから簡単には家に帰れないの」と悲しそうに呟いた。パレスチナで紛争が起こっている事実は何となく知っていたが、誰も当たり前のように帰れる場所があるのだと思い込んでいた私は自身の無知さ故の無分別な考えが情けなかった。



寮の皆と

食堂で提供される食事を全てベジタリアン食にしようという運動が起こった際には、「文化の一部として肉を日常的に食べてきた生徒もいるのに、いきなり菜食主義を全面的に押し付けるなんて」と一度思ったが、相手の主張に耳を傾けてみると、肉食がいかに環境に悪影響を与えるのか、なぜ彼らがここまで必死に環境問題を訴えているのかに気付かされた。

「世界の縮図」とも言われるUWCで多様な文化、宗教、社会的背景を持つ仲間と意見や価値観を共有する中で、幾度も自分の浅薄さを突きつけられた。自信を失うこともあったが、これらの経験は井の中の蛙であった私が大海の広さの片鱗に触れたきっかけであり、間違いなく自分の新たな原点になったと思う。

留学を終えた今、自分の無力さを知り、自分は将来何かを成し遂げる事が出来るのかという不安と焦燥感に駆られている。社会に大きく貢献できるような存在になるためにはひたすら貪欲に、謙虚な姿勢で学び努力し続けることしか無いのだと思う。現状に満足するのではなく、こうした負の感情を持つことが出来たことこそがUWC留学の大きな意義なのかもしれない。この経験を社会に還元できるような人間になるため、今後も向上心を絶やす事なく成長し続けたい。

最後に、このような貴重な機会を与えて下さった日本協会や経団連の皆様にご心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。

* * * * *

圧倒される

榎原 伶惟

UWCのような余に様々な価値観や感覚を持った人が同じ空間で暮らす環境だと、全ての面において、完璧ではなく、みんなの幸福のバランスが保たれる”交点”を探すことを余儀なくされる。部屋で全員が快適に過ごすために、ルームメイト間の感覚や価値観の違いを擦り合わせながら着地点を探すこと、学校の給食を全てヴィーガン食に変更するか学校投票を行うこと、異なる2つの大陸のバックグラウンドを持つカップルが、人生の岐路に立ちながら異なる未来のビジョンについて語り合っている姿。これらは僕の見た、異なる正義や想いに真剣に向き合いながら必死に”交点”を探す弱冠18歳前後の若者たちの姿だった。この交点を探すという行



学校の校舎

為は、他人と自分という関係性の中だけでなく、さまざまな自分の姿に自分自身で向き合う際にも必要になるということもUWCに教わった。さまざまな国のバックグラウンドを持つ生徒が自分のアイデンティティについて悩む姿、難民という呪われた運命と彼自身の夢のはざままで生きる友人の姿。



ルームメイトと友人たち

人々は、交点を探しそれに満足することを諦めと呼ぶかもしれない。しかしそれは、UWCの凸凹な異なる生徒達が僕に教えてくれた、一番正直で真っ直ぐな生き方かもしれない。0か100ではなく、ありのままの姿を大切にすることを教えてくれた。

そして、夜空が眩しすぎるくらいウェールズの片田舎にとって、UWCイギリス校にはたくさんすぎる程のエネルギーと情報、人々の想いが溢れていた。時にそれは圧倒的すぎて息苦しくなるかもしれない。UWCは足のつかない海みたいなものだ。間違いなく最初は怖い辛い。だからこそ後輩達には、この深すぎる大海原に飛び込んで、必死に息をするところ

から学んで欲しい。飛び込んでしばらくすれば、案外泳げるようになって潜れるようになる。そして二年間が終わってみれば、その海の広大さと美しさ、繊細さに感動させられてばかりだったと感ずるだろう。

最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださった全ての方々に感謝申し上げます。

* * * * *

戦友

前田 葵

私が2022年5月に、UWCイギリス校を卒業してすでに半年近く経つ。「卒業生の声」を書くのがこんなにも遅くなってしまう程に、大学生活は忙しいのだ。言い訳はさておき、2年間のUWC生活を振り返ろうと思う。

2020年9月に始まったUWC生活は、IB、コロナ、気候、美味しいとは言えない食事、他人との価値観の違い、劣等感、自己嫌悪など、様々なものと戦いの日々だった。挫けそうな時、一緒に料理をしたり、海辺や草原などに連れ出したりと側で支え、共に戦ってくれた仲間達には感謝してもしきれない。彼らのおかげでさまざまなバックグラウンドを持つ人との接し方、互いを尊重しつつ共同生活をする事、日常の中に幸せを見つける力など、多くを身につけて成長し、2年間生き延びることができた。



プロムで友人達と

現在私は、アメリカの大学で、冒頭で書いた通り忙しい毎日を送っている。

しかし、そんな忙しい日常の中、ふと一息ついたときに思い出すのは、一緒に談話室でどら焼きを作り、海や草原で星空や夕焼けを眺め、食堂のご飯のまずさに笑い合い、2年間で共に戦い抜いたUWCの仲間達との日々だ。



イギリス校から見える海と夕焼け

これからも私は、自らを成長させるために様々なことに挑戦し、多くの経験を積みたい。そして、次UWCの戦友達と再会するときには、どんな戦いをし、どんな道を歩み、何を学んだかを語り合えるように、充実した人生を送りたいと思う。

Pearson College UWC (カナダ校)

シアターキッズ

田中 花奈

小学校から続く一貫校で育った私は、まさに井の中の蛙だった。そんな私のUWC生活は、英語どころか、友達作りさえ不安な状態からスタートした。しかしこの不安は、予想もしなかったかたちで掻き消されることとなる。



公演本番の様子

最初に受けたシアター(演劇)の授業で、2ヶ月後に公演を行うとの発表があった。しかも全校生徒、教職員を招いた90分の大舞台。台本に目を通すと、ラストを締める大役に私がキャスティングされていた。もちろん、英語がままならない私には、もってのほかだった。しかし、この時芽生えたのは、どうしようという不安ではなく、どうにかして成功させたいという使命感であった。

それからの2ヶ月はあっという間だった。気がつけば、私は自分の英語力を恥ずかしかる暇もなく、必死に努力していた。そして、クラスメイトと自主練を重ねる中で、私たちの関係性は「仲間」へと変わっていった。

本番直前、みんなで何度も手を握り、「練習どおり、楽しもう」と高め合ったことを今でも覚えている。振り返れば、あの公演と努力があったからこそ、言語や文化の壁を超えた仲間ができたのかもしれない。

最後になりますが、私にとってUWCは、新たな興味や国を超えた仲間たちなど、数々の出会いに溢れた経験となりました。ご支援いただいた全ての皆様に心から感謝申し上げます。

* * * * *



ウクライナ侵攻を受け、Vitalik 君と
キャンパスに国旗を掲げた

UWC生活最後の朝、僕は寮の談話室で人生を共にしたピアソン・ファミリーへの別れの言葉を探していた。

朝早くに出発する僕に別れを告げにきてくれた友人たちと抱擁を交わしながらも、終わってしまう「あたりまえの時間」を実感し、なんとも言えない涙が出てくるのである。朝7時にタクシーが迎えにくるまでの短い時間。数々の素晴らしい思い出を作ってくれた友人たちと別れを惜しみ、顔をぐちゃぐちゃにしてまで泣きながらまた何処かでの再会を誓う。真の友情がそこには輝いていた。

友人たちに見送られながらタクシーへと乗り込んだ僕は、2年間僕の家であった寮を見上げた。アメリカ・ウクライナ・カナダ・ノルウェー人の素晴らしいルームメイトたちとの思い出が僕の脳裏を掠める。毎夜僕とPS4で遊んでいたアメリカ出身の Aur、星空の下で散歩する時にはいつもウクライナで待つ家族の話の話をいつも嬉しそうに話してくれた Vitalik、冬休みにモントリオールの家で僕を家族の一員として歓迎してくれた Patrick、週末にいつもノルウェーで学んだサッカー技術を教えてくれた Magnus。毎日起きるたびに夢の世界を与えてくれた寮ともお別れだ。最高の後輩、智加と毎夜一緒に勉強していた懐かしの PhysicsLab を通り過ぎ、キャンパスを囲む森を通り過ぎ、よく遊びに行った物理の Mark 先生の家の前を通り過ぎ、友人たちと毎週サッカーをしていた隣町のサッカーコートを通り過ぎ…。

僕は目を瞑り最後のUWC生活を噛み締めていた。その間にもUWCの思い出は過去となり、世界が移り変わっていく。僕はタクシーの窓を開け、前方に広がる海に向かって叫んだ。

「すべての出会いにありがとう！！！」



見送ってくれた友人たちと最後の1枚

UWC Adriatic (イタリア校)

トーマス・マンの『ヴェニスに死す』を読んだことはあるでしょうか。私はUWC生活も終わりに近づいた時期にアートのクラスの友人に勧められて読みました。



カヤック (CAS)

主人公で作家のアッセンバッハは、休養のためにヴェネツィアを訪れ、そこで美しい少年に出会い愛するも、コレラの感染が拡大して人々がヴェネツィアから離れる中で愛に取り憑かれたアッセンバッハは離れられず、結局そのまま病気になるまで亡くなってしまいます。

ある意味では、私もヴェニスに死んだと言えるかもしれません。1年目はコロナの厳しい隔離生活の中、イタリアへの切望が強迫観念へ変化しました。そして、2年目は徐々に隔離が解除されて嬉しいはずが、むしろ苦しみが増しました。それは、未熟な自分を自覚し、人間性が解体・再構築される中で感じる擬似的な死の恐怖に対し、唯一の拠り所であったイタリアの虚像が自分の排除された外部空間へと変化することが怖かったのです。

その中で、アドリア海に身を浸し(カヤックは最高のCASです)、なんとか自分の弱さを振り切って気持ちを新たに再出発しようと思った矢先、自分自身コロナに感染してしまい、快復後も体調が不安定な中いよいよ万事休すか……と思った時に卒業しました。

終わってしまえば、自分の人間性の危機も、UWC生活と一緒に夢のように消えていきました。しかし、夢の中で確かに自覚した自分のあり方は、確かに残っています。苦しみに満ちていたけれど、このような機会に巡り会えたことに感謝しかありません。

* * * * *

「さよならを言うことがつらい相手がいる僕は、なんて幸せなんだ」

庄山 桃子

How lucky I am to have something that makes saying goodbye so hard.

これは、卒業式の在校生代表のスピーチの中でフィリピン人の一年生が引用した、「くまのプーさん」の名言である。この言葉の通り、UWCの2年間を通して多様な人や考え方に会うことのできた私は、本当に幸運だったと言い切れる。

私の学年には、イラク出身の生徒がいた。2014年に起きた、ISILによる虐殺の対象となった少数派ヤジディ教徒の彼女に、1年目のある日、「ホームシックを感じるか」という質問をした。「今は家族みんな生きていることを知っているからホームシックは感じない」というのが彼女の答えだった。家族が生きているかわからない、という恐怖を目の前の彼女が経験してきたことに衝撃を受け、そんな現実への憤りを感じた。



友人と学校の芝生にて

多様性を売りとしているUWCでさえも「西洋的価値観」が優勢であることに違和感を



卒業式

持っていた2年目、ある1人の1年生に出会った。敬虔なイスラム教徒の彼は、他のUWC生とはひとあじ違った人生観、哲学を持っていた。それまで敬遠していたイスラム教について興味を持たせてくれ、私の視点を180度変えるきっかけをくれたのが、彼である。

彼らをはじめとして、UWCでの出会いは、今の私の価値観や人生観の土台となった。新しい人生ステージの中でも、UWCで築き上げた私の土台を忘れず、その経験を社会に還元するという目標に向かって突き進んでいきたい。

UWC-USA (アメリカ校)

小さき者より

室井 美洋

UWCを振り返ると、「小さき者」という言葉がまず浮かぶ。



パティオパーティー

優秀な生徒が多く集まるUWCで、私は己の小ささを思い知った。なかでも印象深い思い出がある。アメリカ校では、生徒の一部が食堂の入り口に大量の食器を残飯もそのままに放置していることがよくあった。私はその食器を何往復もして返却口まで運び、全校宛に「食器を返却するように」とクレームを入れた。それでも翌朝には食器の山があった。怒り心頭の私に、友人は「生徒は止めないだろうから、カートを置いて食堂の従業員が返却口に運びやすくすればいい。」と提案してきた。それを聞いて、私は自

分の視野の狭さを恥ずかしく思った。友人は、食器の山を消すことに執着せず、学校全体によりよいシステムを整えようとしたのだ。目の前のことで手一杯な自分と、課題の本質を見抜き合理的な解決策を提案した友人。私は、どうにも小さく、見える景色が狭い自分を知った。

UWCでは、そういうことの連続だったように思う。とはいえ、私は今、そんな日々を誇りに思っている。これからも、小さき者なりに奮闘していきたい。食器の山を見てみぬふりせずに。

最後に、この2年間支えてくださった全ての方に、厚く御礼申し上げます。

楽しかったアメリカ生活

山田 理矩



ウィルダネスにて

私はこの2年間でどれだけ成長できたか、なかなか言葉では言い表せない。ただ、ふと昔できなかったことが今できていたり、言えなかったことが言えたり、そんな小さなことに気づくたび、新しい環境に慣れない中でひたすら悩み、そして努力した日々は確実に今の私の一部になっているんだな、と感じる。

アメリカ校では90カ国近くから集まった生徒達が共に暮らしている。だから何気ない日常も常に非日常性で満ちていた。友達と夜通しテスト勉強した時も、実験がうまくいかず試行錯誤した時も、いろいろな人とコミュニケーションをとる中で、知らず知らずのうちに目の前の目的以上のものを得ていたのだと思う。

スポーツで熱くなった日も、友達と映画を観た日も、ルームメイトとアニメについて語った日もあった。何気ない非日常のさまざまな場面が記憶のアルバムに加わっていき、それが今の私をかたち作っている。

そんなさまざまな経験をしていく中で私が大切にしていた言葉がある。"Don't judge a book by its cover." ありきたりだがとても大事なことだと思う。多様性に富んだ環境で偏見を持たずに人と接する。それだけでも楽しいし、学ぶものも多いと思う。



ユールボールにて

Li Po Chun UWC (香港校)

Am I spoiled?

片岡 晋作

UWCのある友人は、卒業後はアメリカの大学へ進学して政治経済学を学び、母国の経済発展と民主化に貢献したいと話してくれた。またある友人は、母国の給料では生活が苦しいという。とにかく海外でお金を稼いで、家に仕送りをしたいらしい。彼らにとってUWCは、「憧れの環境」である以上に、彼ら自身の一生を変えることができるチャンスだった。

UWCで出会った友人の中には、軍隊から帰ってきたばかりの生徒、卒業後入隊する予定の生徒もいた。母国で内戦が勃発して、夏休みに帰国できない生徒も多かった。

そんな彼らと自分を比べてみる。いつでも好きな時に日本に帰ることができる。UWCの2年間に一生を懸けているわけでもない。何一つ悪いことはないが、少し後ろめたくなってくる。

一緒に朝食を食べたり、勉強をしたり、そういった日常の中で、こうした会話がふと始まる。そして、今まで見えてこなかった友人たちの一面に気づく。そんなUWCでしか起こり得ないような日常を繰り返していくうちに、世界で何が起きているのかを少しだけ知ることができた、そんな2年間だった。



ルームメイトと

* * * * *

「多様性」

前田 帆南

思えば留学前には、UWCに属せば自然と「多様性」という言葉の本質が理解できると過信していた。

三学期の半ばを過ぎた時、隣の部屋で起きた喧嘩が発端となり先生から突然ルームメイトの変更を告げられた。結果、私以外の3人のルームメイトが全員香港出身となり、広東語ばかりが飛び交う毎日が続くことになった。

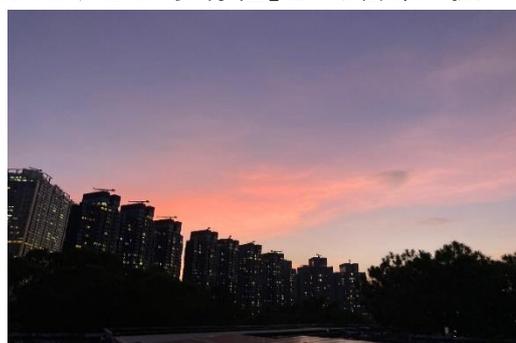


ルームメイトと

確かに、先生が下した「日本人だから文句を言わずに誰とでもうまくやっていける」という判断は間違いではなかったのかもしれない。それでも、多様性を掲げるコミュニティの中で自分が果たす役割を出身国で決めつけられた悔しさは忘れられない。

この経験をはじめとし、UWCで過ごした間何度も大きすぎる「多様性」という言葉に振り回された。多様性を尊重するあまり、理不尽な意見が通り衝突が生まれる場面を幾度も目にし、反対に全ての議論に対して自分の確固たる意見を常に持つ必要があった。

身一つで飛び込んだ2年間、異なる背景を持つ同世代との関わりを通じて得た刺激は、私の宝物だ。これからも新たな価値観に怯むことなく、自己の夢の実現に向けて日々精進していきたい。



学校からの夕焼け

最後に、貴重な環境で学ぶ機会をくださった多くの皆様に心より感謝を申し上げます。

UWC Red Cross Nordic (ノルウェー校)

ひとりとは多様

名淵 結乃

UWCでは自分の全てを一から疑っていた。性別、宗教、セクシュアリティ。自分のみならず、他者のアイデンティティ、その影響について考え続けていた。潜在的な偏見がいつ表面化するか怯える日々でもある反面、考える事は純粋に楽しかった。

しかしそれは、「ペルソナ(他者に見せる自分)」を強く意識する事でもあった。生徒会や LGBTQ+のグループ(GAS)等コミュニティベースの活動が多かったせいもある。GASに自分以外有色人種がないのを変えようとして、日本文化が誤解されている時、反論する義務感を持ったり。



プロジェクトウィーク「日本料理と水の利用」をテーマに



アジア人交流会

啓蒙活動と承認欲求は紙一重だ。人数の少ない学校だった事もあり、今までになくコミュニティを気にした2年間は、同時に、周りの人の本質的な人格の重要性に立ち返る時間でもあった。結局、大切なのは病気の時、食堂から夕飯を運んでくれる、朝3時まで議論に付き合ってくれる、その人の人間性だと実感した。

最近叫ばれる「多様性」は分かりやすく違うアイデンティティを持つ人々のコレクションだけでは達成できない。目の前にいる1人の持つ、数え切れない人間性の側面、思考の流動性、ランダムな経験、そんな全部をひっくるめて「多様」ではないだろうか。1つのアイデンティティが違うだけで物珍しさから多様性扱いするのではなく、人ひとりの複雑さを理解しようと努める姿勢は、UWCでの経験の賜物だったとやっと思える。

UWC Maastricht (オランダ校)

自己の把握

松元 謙斗

人に勧められた道を辿る、半ば自分の意志の介在しない人生を変えたいと思いUWCに入学した。今まで生きてきた中で初めて自分自身で選んだ道は、決断の連続だった。日本の高校生活とは違い、国際的な環境の中で与えられる勉強科目の自由、さまざまな価値観やバックグラウンドを持った人と交流する中で自分のものとして落とし込む考え方など。遠い異国の地で自分の人生を形成していける環境は自由がある反面、膨



卒業式

大な選択肢から選ぶ人生における選択に対する責任を持つことの必要性を感じた。その選択によって影響する周りへの対処、それによって起こる変化を好むことができるのかどうか。日本では自分の意思が人生に組み込まれているという意識が少ないと感じていた裏には、それによって起こる責任を、親や周りの人々に負ってもらっていたということに気づいた。

選択を重ねる上で、個人的に一番重要な存在だと感じたのはその選択についての意見をくれる人々の存在だ。UWCでは生まれ育った環境は全く違っても、生まれた年代として持っている意見や考えている共通点も多い。その中で自分の選択を支えてくれる人の存在を得ることができたのが、UWCで得た一番の財産だ。



最後の別れ

* * * * *

禍福は糾える縄の如し

岩見 春佳

中国校での1年目、文化の壁は厚く、自らの無知と英語の拙さが恥ずかしく、うまくいかないことばかりで苦しくて、よく泣いていた。そんな時、辛いことも永遠ではない、いつか必ず「福」が来る、という意味で自身に言い聞かせていたのがこの言葉だった。

「禍福は糾える縄の如し」。心中で何度唱えたことか。

大変だが充実した中国での生活はコロナ禍により中断され、私は1年の休学の後、オランダ校へ編入することになった。

休学中は中国校で直面したカルチャーショックを自分なりに消化するため日本について考え、学んだ。1年後オランダへ渡った時、私は確かに自身の成長を感じた。語学力だけではない。異なる文化、意見に対する許容量が大きくなり、だからこそ自信を持って自分の意見を出せた。会話はより深く、学びはより豊かになり、何より笑顔にあふれた1年だった。

苦しい時こそ人は成長し、状況を好転させる力を養える。以前は禍が過ぎ去る時を漫然と待っていた。けれど中国校でのもどかしさも、コロナ禍も休学も全てが成長の糧になった。この経験が逆境に対峙する勇気を与えてくれる。



中国校からオランダ校へ共に転校した親友たちと



Cologneにて

よく泣き、よく笑い、よく学び、よく遊んだ。
間違いなく私の人生を変える3年間だった。

さまざまなことがあった道のりをずっと支えて
くださった日本協会の皆様、経団連の皆様
には感謝してもきれません。

ご支援くださった全ての方々に、心より御
礼申し上げます。

UWC Robert Bosch College (ドイツ校)

UWCでの日々で大切だったもの

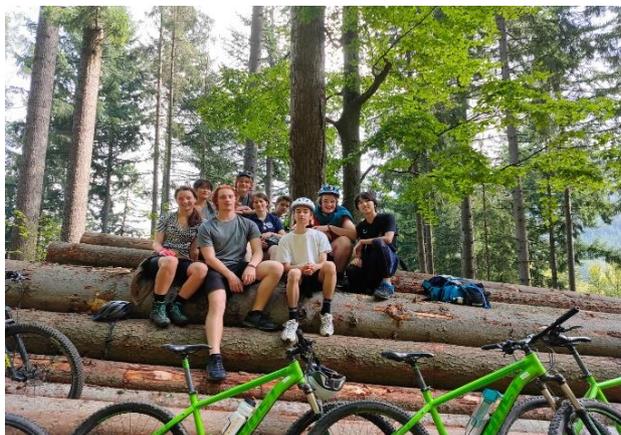
吉田 岳史

UWCでの経験は充実した思い出や学びということだけでなく、後悔や辛かった記憶ということも含めて、今後の自分を語るために必要不可欠なものになったと感じます。UWCで何が一番心に残るかは千差万別だと思います。

ドイツ校での生活は環境問題や人種差別など社会的な課題を深く考えるきっかけになりました。キャンプやハイキングに行ったり、Spring Day(学校の庭で作業したり、民族衣装に着替えたりする授業の無い楽しい日です)のようなイベントもとても大切な思い出です。しかし、私にとっての一番心に残っていることは何気ない日々の時間、あの場所ですごした時間です。キャンパスを歩いている時間や食堂で話をしていた時間、そうした何気ない時間を今一番思い出します。もっといろいろな人と話せばよかったかな、とか、もっとフライブルグの街(ドイツ校があるドイツの都市)と関わればよかったかな、等、後悔もたくさんあります。



朝食を食べに行く途中の景色



キャンプ

ドイツ校での思い出や今思うような後悔も含めて自分にとってのUWCでの経験です。自分の後悔を自分で認められるような人間に、そして、UWCでの経験を自分の中に留めておくだけでなく、社会に還元できるようになりたいと思います。

UWC Dilijan (アルメニア校)

不完全の先に

大崎 永菜



友人と

夏の間、アルメニアのアパートを借り1人で暮らした。

朝の遅いアルメニアで感じる日本とは違うゆったりとした時間の流れ。足繁く通ったエレバンの Mirzoyan Library には、UWCでの葛藤と挫折の中も進み続けた思い出が詰まっている。

「UWCで学び、私が世界を変える」と自信に満ち溢れていた新生活。現実には圧倒的な才能と強い思いを持っている友人に囲まれ、輝かしい活躍をする彼らの陰で何も成し遂げていない自身の未熟さに直面し、自分を見失っていきばかりだった。

しかし同時に、自分の人生との向き合い方を教えてくれたのも彼らだ。全く異なる考えや価値観を持っている彼らと、時に議論し合い、新たな世界の見方を学んだ。人と比べず、自分の成長を認めていたアルゼンチンの友人。幅広い興味で学ぶ喜びを広げていたマレーシアの友人。彼女達から生き方の多様性を学び、今も彼女達を尊敬している。



UWC Day

今後私は未熟な自分を素直に受け入れ、足りない部分を少しずつ補っていきたい。己を知る2年間の経験と生涯学びあえる仲間との出会いの機会をいただき、心より感謝を申し上げます。

* * * * *

気づかぬうちに変わる自分

櫻井 直人

日本での成功体験や中国での生活経験をもとに、私はどこに行ってもなんとかやれる、という根拠のない自信があった。とにかくワクワクしていた。何もしなくても「いい」環境に恵まれると高い期待を持っていた。

そんな期待は渡航してすぐに打ち碎かれることとなった。新しい人に新しい学校、言語の壁に文化の壁と自分自身を失望させるには十分な環境だった。自分の好きなバドミントンができなく、口に合った食べ物も食べられない、そんな生活に絶望していた中、唯一の救いは友達だった。今でも仲のいいマダガスカル人の友達とは気が合い、話していくうちに、発展途上国であるマダガスカルの実情を知れて、自分が日本に生まれ育ってどれだけ恵まれていたのか再認識させられることも多々あった。

それでも正直生活は楽ではなかった。友達は少なかった。いろんな人と交流して意見を交換し合うのが奨励されるUWCで、私はそれを後ろめたくも感じた。パーティーという(唯一の)娯楽であり、社交の場を楽しめないのも後ろめたかった。でも友達のおかげで、できないものはできないのだと割り切ることができた。



卒業式

卒業式は泣いた。そんな自分にびっくりした。いつの間にかあのUWCの環境を、支えてくれた友達が常にそばにいることを当たり前にも思っていたのだろう。

正直、私がそこまで楽しめなかったように、UWCが楽しめるかどうかは人によると思う。しかしどれだけその過程が嫌だったと感じたとしても、今振り返るとUWCに行ってきたと思えるし、ここ2年間の出会いや経験が得られたことにとても感謝している。

* * * * *

Room 111

和田 万由子

アルメニア2年目の夏、私に振り分けられたのは北向きの日が当たらない、1日中薄暗い部屋だった。家具で区切られた4人部屋にある、私のスペースは大きな窓に面していた。とはいえ、一階にある私の部屋からの眺めは決して良くなかった。

部屋から一歩出ると、そこには私が夢にまで見ていた留学生活があった。山に囲まれた大自然の中にある校舎、いろんな意見が飛び交う授業、見かけも出身も考え方も違う同級生。すべてが常に自分にとって新鮮で、輝いていた。

そんな眩しい生活に照らされた私は、その自分分の影も大きくなった気がした。自信のなさから授業中には思うように発言できなかった。夢や自国のことを熱く語る同級生を前に、自分のことはうまく話せなかった。アルメニアでの留学生活は同時に、自分の弱さに向き合う体験だった。

そんな毎日の終わりに部屋に帰って自分を省みる時、そこはいつでも暗くて眺めは悪かった。



ルームメイトと

2年間も終わりに近づいてきたある日、ルームメイトにそんな私の心情を明かしたことがあった。彼女はそんな私を全肯定して、ハグをしてくれた。薄暗い部屋の中で、光を感じた瞬間だった。

そして2年が終わり、寮の部屋から引っ越す時が来た。暗い部屋からは外に出て、自分の弱さを認めて、次の場所では果敢に挑戦していきたい。

UWC ISAK Japan (日本校)

家族

伊東 真菜美



ポットラック

“UWC ISAK Japan is a family.”

これは、日本校の校長がいつも口にしてきた言葉だ。2年間かけて、私たちは本当の家族になったと思う。日本校の伝統に “gratitude circle (感謝の輪)” がある。それは、みんなで輪になって日頃の感謝を伝え合うというものだ。

コロナの影響で卒業式が1週間早まり、IB試験の直後にお別れをしなければならなくなった。卒業式の前日、みんなで料理を持ち寄り、晩御飯を食べるポットラックをすることにした。いつものように、世界中の料理がテーブルに並ぶ。馬鹿なことを言い合いながらも楽しい時間を過ごし、最後に “gratitude circle” をすることにした。もう一生会うことができないかもしれない一人一人に、お互いが尊敬と感謝の言葉を伝えていく。その言葉に嘘はない。全く違う境遇から来ているからこそ、ステレオタイプなど関係なく、その人自身がどのような人なのかを見つめ、私たちは一から関係を築いてきた。そして、どんな大変なことがあっても私たちは、お互いを気遣い、向き合い、感謝することで前に進んできた。その日の食卓は、いつになく温かい言葉と笑顔と涙でいっぱいだった。



ホリフェスティバル

全く異なる世界から来た私たちは2年間をかけて、まぎれもない、家族になっていた。UWCだけでなく、世界中の人々が本当の「家族」になれるように、この経験と深い友情を糧に前に進んでいきたい。

◆2022 年度
UWC日本協会の活動◆

2022 年
【5月】

20日：第26回理事会
(於 経団連会館)

【6月】

19日：2022年度派遣生と保護者の
ためのオリエンテーション
(オンライン)

23日：第11回通常総会/第27回
臨時理事会
(於 経団連会館)
2022年度派遣生激励会/
対面オリエンテーション
(於 経団連会館)



【7月】

8～10日：卒業生会主催 2022年度
派遣生オリエンテーション・
キャンプ (於 国立オリンピック
記念青少年総合センター)



22日：2020年度派遣生帰国報告会
(オンライン)

【9月】

11日：2023年度派遣生説明会
(オンライン)
※約208世帯参加

【10月】

25日：第28回臨時理事会
(於 経団連会館)

【12月】

11日：2023年度派遣生一次選考
<筆記> (於 東京、大阪)
※91名受験

2023年

【2月】

13日：2023年度派遣生二次選考
<面接/グループディスカッション>
(於 経団連会館)
※34名受験

【3月】

16日：第29回理事会
(於 経団連会館)

イギリス校を 林 駐英日本国大使がご訪問



(写真提供：在英国日本国大使館)

2022年11月7日、イギリス校を 林 肇 駐英日本国大使が訪問されました。

ナイド・バラダイ イギリス校長をはじめ関係者から、UWCの教育理念や、同校のディプロマプログラム、CAS等の活動について説明を受けたのち、日本協会から派遣された生徒らと、カレッジ生活の様様について和やかに歓談をされました。

藤田 UWC 第5代会長がご退任

2007年より15年間に渡り、UWC日本協会の会長をお務めいただいた藤田讓会長（朝日生命最高顧問・当時）は、2022年6月23日の第11回総会をもって退任されました。

「一人でも多くの日本人高校生がUWCでの貴重な学びを経験できるよう努めたい」と常におっしゃりながら、協会の運営、会員企業の勧誘活動にご尽力をいただきました。

総会当日に開催された2022年度派遣生激励会で、藤田会長は「海外との交流なくして日本の発展はなく、グローバル人材の育成が重要である」と語られるとともに、「人生においてスムーズにいかないことがあっても諦めず、夢の実現に向けて努力してほしい」と派遣生を激励しました。その後、卒業生が花束を贈呈し、「15年間、ありがとうございました」と感謝の言葉を伝えると、会場からは惜しみない拍手がおくられました。



➤ 『年齢を重ねることで、さらに深まる関係性』

古谷 優子（アメリカ校 1989 年卒）

慶応義塾大学卒業。国際業務専門の行政書士として独立開業した後、外資系コンサルティングファーム内行政書士法人で勤務。現在は Vialto パートナース行政書士法人に所属。



UWC-USA での同窓会（中央が本人）

UWC卒業から30年以上経つが、同窓会やSNSで友達とつながり続け、それぞれに家庭やキャリアを持つ中で、日々気づきや励ましを得ている。お互いに年齢を重ね、心の余裕や思慮深さも増し、相手を思いやりつつ率直に話すという深い喜びのある関係が強まっていると感じる。

UWCには過酷な現実を生きている人が少なかった。独裁政権とのゲリラ戦を戦う親と亡命生活をした人、子どもが武器を持つスラムから来た人、自分のアメリカでのバイト代より実家の収入の方が

少ない人。当時は言葉にできなかったことを成人してから明らかにした友達もいる。寡黙なブラジル人の友人がいたが、彼女の両親が軍事政権に対する地下活動家で、拷問を受けても情報を漏らさない訓練をする親の姿が彼女の寡黙さにつながったことは、彼女が数年前に出版した本を読んで知った。

切実な現実に対峙し、自らに力を与えながら願いをこめて生きる友達の姿を見続けてきたことが、私の中に小さく火を灯し続けている。日本で法務専門家として働く私の面する現実とは異なっているが、「何が大切か考え、勇気を持って行動する」という友人たちの姿が様々な決断の場面で私の指針となっている。

➤ 『UWCで鍛えられた思考力と精神力』

菅沼 珠世（香港校 2004 年卒）

UWC卒業後、一橋大学に進学し、国際政治学を専攻。2009年株式会社資生堂に入社し、国内営業を経て、タイ・シンガポールでのアジアパシフィック地域のマーケティングおよび地域本社立ち上げに従事。2019年INSEADにてMBA取得後、現在は本社経営戦略部にて、全社横断プロジェクトをリード。

近年、Diversity & Inclusion が社会的に大きな関心事となっていますが、私にとってUWCは、D&I BOOT CAMPのような2年間でした。徹底的に「普通」という価値観を捨て、「自分」とは何かを考え続けることで、あらゆる違いを楽しみ、自身のあり方や考えを常に意識することが、身体の一部として染みつきました。

資生堂にて、8年間従事したアジアパシフィック地域本社での業務は、国、気候、宗教、所得など、多様なアジアの生活者の嗜好や価値観を捉え、日本のブランド開発チームに繋ぐことを主とし、まさにUWCの経験が生かされた天職でした。本社にて全社戦略に携わる現職でも、経営層と共に、明瞭な解がない課題と向き合う中で、先入観なく状況を精査し、課題の根幹が何かを問い、自分だったらどうするかを常に考えるというUWCで培った思考の癖が、自身の強みとなっていると感じます。

同時に、UWCにて想像を遥に超えた世界に触れたことで、変化に動じない精神力を鍛えられたことも大きな財産となっており、今後もUWCで得たこれらソフトスキルを糧として、日本と世界を繋ぐ一助を担っていければと思います。



APAC マーケティング会議（一番左が本人）

◆UWC派遣生の推移◆

(1972年度～2023年度)

2023年6月現在

カレッジ 年度	イギリス		カナダ		シンガポール		イタリ		アメリカ		香港		ルウェー		インド		オランダ		コスタカ		ドイツ		アルメニア		中国		日本		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
1972～2014	88	120	44	73	13	19	16	35	22	33	11	9	4	6	4	17		3	1			1								519
15	1	3	1	1			1	1	2	1	-	1	-	1	1	1	-	1	1	-	-	1	1	-					19	
16	2	2	-	2			1	1	1	1	-	2	-	1	1	1	-	2	1	2	1	-	1	1	1	-			24	
17	3	1	-	2			1	1	-	2	1	2	-	1	3	-	-	1	3	1	-	1	1	1	1	1	1		27	
18	2	1	1	1			1	1	1	2	1	1			-	2	-	1	3	-	-	1	1	2	1	1		24		
19	-	3	1	1			-	2	1	1	-	2	-	1			1	1	-	2	-	1	1	1	-	2		21		
20	2	2	1	1			1	1	1	2	1	1	-	1			1	-			1	-	1	2			-	1	20	
21	-	3	-	2			-	2	1	2	-	2	-	1			-	2			-	1					-	1	17	
22	1	3	1	1			-	2	1	1	-	2	-	1			1	1			1	-					1	-	17	
23	1	2	-	2			1	1	-	2	-	1	-	1			-	2			1	-					-	1	15	
合計	100	140	49	86	13	19	22	47	30	47	14	23	4	14	9	21	3	14	9	5	4	6	6	7	3	4	1	3	703	

◆UWC卒業生の進学実績◆

(2014年～2020年にUWCを卒業した派遣生の進路のうち、主なもの)

【海外大学】

●アメリカ

Amherst College、Bates College、Brown University、Columbia University、Colby College、College of the Atlantic、Colorado College、Columbia University、Earlham College、Grinnell College、Kalamazoo College、Lake Forest College、Leiden University、Lewis & Clark College、Macalester College、Methodist University、Middlebury College、Minerva Schools at KGI、New York University、Northwestern University、Princeton University、San Diego State University、Smith College、St. John's College、St. Lawrence University、St. Olaf College、The University of Oklahoma、UC San Diego、University of Pennsylvania、University of Rochester、Wesleyan University、Williams College、Yale University

●イギリス

Aberystwyth University、Imperial College London(ICL)、University of Cambridge、University College London(UCL)、Wesleyan University

●その他

The University of New South Wales(オーストラリア)、Quest University Canada(カナダ)、University of Toronto(カナダ)、University of British Columbia(カナダ)、Sciences Po Le Havre Campus(フランス)、ESCP Business School(フランス)、Amsterdam University College(オランダ)、Delft University of Technology(オランダ)、University of Amsterdam(オランダ)、Bard College Berlin(ドイツ)、Catholic University of Leuven (KU Leuven)(ベルギー)、Politechnika Wroclawska(ポーランド)、Yale NUS(シンガポール)、IE University(スペイン)、Yale NUS(アラブ首長国連邦)

【国内大学】

東北大学、東京大学、東京医科歯科大学、慶應義塾大学、国際基督教大学、上智大学、早稲田大学、京都大学、岡山大学、大阪大学

公益社団法人 ユナイテッド・ワールド・カレッジ日本協会

会 員 企 業

2023年6月12日現在

(敬称略・順不同)

アサヒグループホールディングス	ソニーグループ	富国生命保険
旭化成	第一三共	富士急行
朝日生命保険	第一生命ホールディングス	富士通
アステラス製薬	大成建設	富士電機
ADEKA	大和証券グループ本社	古河機械金属
安藤・間	中外製薬	古河電気工業
伊藤忠商事	東京海上日動火災保険	丸紅
ANAホールディングス	東芝	みずほフィナンシャルグループ
ENEOS ホールディングス	東レ	三井住友海上火災保険
王子ホールディングス	日清製粉グループ本社	三井住友フィナンシャルグループ
キッコーマン	NIPPON EXPRESSホールディングス	三井物産
サントリーホールディングス	日本軽金属ホールディングス	三井不動産
島津製作所	日本製鉄	三菱ケミカルグループ
清水建設	日本生命保険	三菱重工業
住友化学	日本ゼオン	三菱商事
住友商事	日本電信電話	三菱電機
住友生命保険	野村ホールディングス	三菱UFJフィナンシャル・グループ
積水化学工業	東日本旅客鉄道	横浜ゴム
セブン&アイ・ホールディングス	日立製作所	

【56社】

【個人会員】 佐藤 輝英(ビーネクスト キャピタル マネジメント ファウンダー・CEO/UWC卒業生)

最近の動向

新型コロナウイルス感染症拡大により、海外で学ぶ日本人の数が大きく減少しました。2020年度を底に2021年度は増加が見られるものの、まだ2018年度の10%ほどに過ぎません。

このような困難な時期であっても、世界各地のUWC校で学ぶことを選択した派遣生の皆さんに心からの声援を送りたいと存じます。

日本協会では、一人でも多くの日本人高校生がUWCにおける「人生を変える体験」ができるよう、ご支援いただける企業会員や個人の拡大に向けて積極的に活動してまいります。

公益社団法人ユナイテッド・ワールド・カレッジ日本協会

会 長：小 路 明 善（アサヒグループホールディングス会長）

専務理事：長谷川 知子（経団連常務理事）

事務局長：益 子 千 香（経団連SDGs本部主幹）

事務局：〒100-8188 東京都千代田区大手町1-3-2

一般社団法人日本経済団体連合会 事務局内

電話：(03)6741-0163 FAX：(03)6741-0351

E-mail: uwc@keidanren.or.jp

Website: <http://www.keidanren.or.jp/japanese/profile/UWC/index.html>